



全傳

勇婦
子
本文料等出

初編

卷之五

18巻
977
5



13
巻 5
977

木

全勇婦繪本更科草帑卷之五

遠州小夜中山麓栗枝亭鬼卯述

更科再び森之助小逢ふ話

斯^ス更科ハ其田五郎と心と合セ武田晴信馬場美濃

守^シと^シ武田家の勢いありんうれば折は

得^トば^ト下のものどもと商人ふ仕立甲州の

と^ト且^ト山中あううういー系子此生死と

は^ハ吉田太郎郡内弥惣とのなき

酒^サ店^トふ入る二人酒とのいねとつん

小^コ眠^ネり^テ多^ク此^ノ時^ニ甲^ノ州^ノ町^ニ奉^ヒ行^キ今^ノ井^ノ市^ノ郎^ノ非^ニ常^ニ見^レ

勇婦繪本卷之五



今井市郎

今井市郎

今井市郎西の
商人と見く他邦
の考者より以
悟る



太郎

弥惣

廻り廻り多飲小酒店に二人の客眠り居たり其
 由商人のむくりれども商人よりうけせしに
 市郎氣にやれ若者めう他邦の両者うり
 と悟りてこれ擲しりまに終ひ縄とぞ掛りり
 弥惣太郎ハ快く熟酔し所をうりて夢のそ地
 引立ちらまきそ是非もなれ今井市郎ハ執権
 馬場美濃守ふまぐくの訴されば美濃守彼ホ
 と拷問してしき初ハ何事も言はざりしと叢鋪
 せえりも蕭が嵐に住賊まう首領ハ三島おせんと
 いら女らハ美濃守をふく恨の時節とかり馬
 場の屋鋪へしりんと我ハ細策ふまがれ酒

と過し召しきしと包ちげ白状しるまは
 美濃守眉とむそり家知年より政道ハ毫毛も私
 うらびふくうみと受るゆえなりと云ひしに沈吟
 してうらやみれがしと手とり汝ホハ首領とハ何
 國のものぞ弥惣あえり三島おせんとハヤせども実
 信州村上の家士とも聞えハ美濃守之らくまうふ
 不日討手おひこふ登し汝ホ其れ案内とらんを
 らハ命を助く登しと獄屋へ引立させ晴陰公の海
 前へ出く近頃苗吹峠の地おりりし籍ハ嵐と
 所ハ盗賊住す殊ハ首領を女とす捨ゆくとも
 何ぞのゆりんとハぞんぞれども此地敵方より取

紫とらさば 當家の愁いふらへば 某まうり 向ひて 退治せん
 と言上り 々々 晴信公わしをいひ 鶏と列不牛乃
 刀を用いん 小盗人のともがら 汝が向らん ぞうぶ
 他 一時 踏つぎ べしとのる人 美濃守重
 某どんと 子細に 此討手 是非も 仰付られ 下は
 ぶーと ころり 福が いたれば 走らば 兎も 角も かく
 ふ 登り といひ とも 玉り 美濃守ハ 私宅 小く 孝
 兩人の 賊と 呼出し 言々 我つ かり ぶ ぶ
 の山 立こり 盗賊 其の 首領ハ 女と され ば 取
 ころび 某直 ぶと せむ 和と ころり 他邦 へつ ころ
 さんと かり ころり 汝ハ 明日 ころり へ 之と 其 かり ころり ころり

上 某も 押つ 登山 利害 との ぶ 其 所と 去ら ぬ
 和睦 の 小長 檀一ツ と 送らん これ と 持 久 して 言
 領 小 某が 心底 と 述べ 温潤 の 一言 小 西人
 の 大 屈伏 ころり ころり ころり 首領 ころり ころり
 せ 何 無事 と ころり ころり ころり ころり 美濃
 守ハ 腹心 の 勇士 四五人 謀と かけ 中間 小 立 長檀
 うね 荷 翌朝 二人 の 賊ハ 彼檀 と 才領 ころり 勇士 ころり
 諸も 先 へつ ころり 其 身と ぶ 登山 ころり 用意 ころり
 ころり 孫 惣太郎 の 二賊 かり ころり ころり 命
 と 助 長檀 と 貫し 中間 小 荷 ころり 山中 ころり け
 き 更科 箕田 五郎 ハ 先達 ころり 捕子 と ころり ころり 扱ハ

異域全傳卷之五

三

こつりとこつれつりと心ゆくばらばらと孫惣太郎立
 かつり長櫃と玄関のまん中ふ直一美濃守がひひ
 るとつづつづにのどくれば更科ハよほこびかえを美濃守
 和と謀く此所へ来るとハ夫のゆゑなりた人敷百人ハ
 寄るも不知案内の山中るれば取込ぎ一人ハ逃
 討とべーも用意せよとむくくうらとや追くハ
 登山もるやりよとれば更科ハ長カウいこ其田五郎ハ鑑
 引り門外ハ討とるんと勢とんぞかけ行とるは
 かりいもよと長櫃の中よりやあく兩人とやまるる
 き馬場美農守信房寂前より来とて見恭人
 立出まハ中間と見えとハ一騎當千の若武者いづまも

小手もつら小身とかく威風アんと守護
 かりよ更科五郎もゆりきハ馳へり美濃守
 と追取巻盲龜の浮木うどん花のま待えと尋常
 小勝負せよとつらよのう吃と息と見えあまバかりいも
 よと家夫相木表之助より美濃守と夫表之助も
 かゆ似つと聞つとや憲一とやり空目や
 腫とよとてたまハ表之助完尔とよひつし
 や女房無事ふらつら其不量美濃守ハたきけられ
 一条物と悠々と坐小とよと更科五郎も忙
 鑑長刀と投とてやれと坐おととる表之助
 一とつら一家長反跡部が妍計とて既小とる



更科馬場美
濃守を討人
我夫と逢ふ

箕田五郎

更科

弥惣

相木森之助

首とくんとせしに晴信某とくみ多し
 そまのり美濃守ふ示し美濃守々古の早
 く其意とさうり似たりや似たり花菖蒲
 古事とさうり花首と打や枝とさうり
 いら落むかりと人ふ見せりつらりと重罪の者に
 家衣裳と着せ々右エ門首と討くむ法と汝よ渡
 しきり夫より某ハ美濃守が陰武者と成て所
 の軍ふ出さ一度も不覺とさうり武田の家士等
 某が美濃守ふ似る回へ真れ馬場とくむ
 一たりと始終と語るれば更科がよろこび何
 へん天地と拜しよろこび涙と油とぬる
 君の

かく無事ふおつと附る面目なれとさうり
 あひしとれ身とくむりて何里し小此山の禁
 と馬子誕生し蝶と花と育しと猿小兒
 大集はさす死もさうり猶此山へさうり来
 りれく山賊もふ出會首領と成箕田五郎と甲州
 と亡さんと計りさうり語るれば
 助も涙とさうり不幸し主人のさうり
 刺敵国おさうり却く敵国の軍師とさうり
 世の因縁さうり人近頃信州のさうり
 九郎ハ君と諫さうり館と立退し身の父右馬之助
 病死しあら牧島玄蕃も討死しとれば主人義清

今ハ見んくなく越後の輝虎公とたのも隠きおれぬ
 聞よりあつて越後と戈とすまへふふの心を是よりハ
 此身も修も美濃守の亭ふつら恩と謝し山
 林ふ引より世と安く暮さんとせりふらりきりつて
 何れも何れと對面せざるもあつらんと箕田五
 郎ふひい足下長く思妻と補佐し玉つら返ぐ
 も辱し只今やぶと主人足下の国ふゆせむ向後弓
 引より叶はば是より山林へ引籠も足下ハをり
 手下の賊とすく越後の岩ふふし住し
 たりもバ系越後方へ岩とゆりし罪らるる
 事とすけらるいふたれバ箕田五郎も感心し足下乃

志感ト入まりあつて我ハ中り鴉勘左工門め
 時節と待人内室と修もいと下山したる人
 いふれ便料も是まの厚情と謝し且一間より
 おうと呼出し我ハ夫と俱に甲州へせりむく回其
 方ハ手下の者ふつらけら加賀國へ送らるる
 向後よく親くお仕へてと教訓しこれバおさくハ更料
 う情はふく感トえんとすまは手下的の心
 利さるふおつつけ加賀へ送らつらハ森之助諸
 簫が嵐と立出たり

森之助夫婦幼子と得る話

此時甲州よ武田晴信公諏訪頼茂の息女と男

子出生し多し是四男勝頼君なり晴信公乃悦
 掌中の珠とわぐ多し新お御殿と建多し是と新府
 と号し勝頼御曹司と移しむし長坂左工門入道
 長岡跡部大炊とぬちし新府よつうりしむ
 夫之助と深しむる者なりしが美濃守も心と
 なるへし晴信公へ折ふるは吹挙し多し晴信
 公も何ぞぞ召抱んし多し二君お仕へし
 ろれバやゆくと得ば其まきし多し此度夫之
 助ゆりゆく妻更科と召しき歸せられバ美濃守
 打しむし先日賊の詞お足下の室にありし多し
 熊し長檀お入るし對面をせし今長坂跡部新府

おられバ慥し所おし叔父相木市良兵衛お久し
 對面らぶしゆり多しおれバかたけしと夫婦市良
 兵衛が宅おこりし疎遠の情と述べられバ市良兵衛を
 死しむる夫之助お達より多しおれバ市良之然
 嫁孫おもひ合せ酒飯とりけて饗宴し多し此時
 孫鹿之助更科と見えしおれバおれバ膝へし
 上り多し更科も又我子の事をしりし多し
 者おあはれ此お兒とせし程お成人らん多し
 浮世やとる涙ぐむ多しおれバ此お兒とつくぐと見えし
 去年猿お集りし子おをこし多しおれバ
 お生うつしおれバお甲も嫁お実子なるやと尋多し

森之助夫婦相本
市郎兵衛が方か
我子と得る



市兵衛

市良兵衛

女房



森之助

鹿之助

更科

森之助夫婦相本

市良兵五引くもされば此孫小付く不忍義の物
 語り去年痘瘡うも初孫とくさひきり苦
 提門入く世々たの寺法成寺へさんけいせい山
 かくめく小児の泣声も向中其所より小児
 と鹿の脊小の世猿是とかへく寸体るれば天より孫
 をとくと有く猿鹿と追つけ懐き帰る鹿の
 脊よりく小児をれば鹿之助と号く音くもの
 がりたるが更科ハ仰天さききぎの事小物成
 是ハ正しく承腹より出子あつて坐いかずくの
 こりあつて此子とくさひきりたぶんと賊地小落入
 一始末さきつづに語るれば市良兵五も一家の縁尽

ば家方小頼いせきしうだきとらやききバ共之助
 も市之悉もよろこびふたんど更科又くらく承
 夫婦ハ日蔭の身うればききり今までの通りに預
 びむき住所ともさめらるる改り此を承受人
 けりたるが市良兵五親子も何がさて一家のりいつふ
 は身未迎いふつくりり早速つくりりべいと約束
 して夫婦を美濃守が亭よりく
 森之助甲府と辞して遠州小趣話
 森之助夫婦馬場が方ハ安楽ようく
 共之助美濃守がき人小出さうく其君に恩澤
 ようく一命と延し是まぐの西原志誠小謝る

金一いんしん 其身みみ 養育やしよく 一ひと 軍学ぐんがく 劍法けんぽう と教しゆ 多おほく 天晴あまはら 天
 下かみ の英雄いひゆゆう とうらべ、いりへつふ渡わた 一ひと 更科さらしな 小麻こあ 之助のすけ
 と渡わた 一ひと 多おほく 林はやし 之助のすけ 也なり 市良兵卫いちらべゑ が直実ちかみ と嬉うれ 一ひと 是こゝ
 まるゝの養育やしよく と厚あつ 一ひと 礼謝れいしゃ 一ひと 鹿之助しかのすけ とうけ取と 互たがひ に
 別わか まるゝて遠州えんしゆ 諏訪すゐ が原はら へぞせしきくは
りのすけ 森之助もり 井上いの上 九郎くわ 小達おと ふ話はなし

夫おとこ 一ひと 相本あいにま 森之助もり 之助のすけ 八妻やちつま の更科さらしな 一ひと 子鹿こしか 之助のすけ と
 なるゝ諏訪すゐ が原はら の城しろ 一ひと 至いた 一ひと 林はやし 之助のすけ 近隣きんりん の百姓ひやくしやう 共とも 馬場ばば
 美濃みの 守もり 此城このしろ と守もり 一ひと 期き 一ひと 水みづ の低ひ 一ひと 家子けこ のぶとく
 来き 一ひと 林はやし 之助のすけ 也なり 民たみ と撫育おほ 一ひと 家子けこ のぶとく
 一ひと 刀やいば 血ち と濡ぬ 一ひと 駿遠せんえん の輩とも 森之助もり

夫おとこ 一ひと 福有ふく 心こゝろ の依よ 一ひと 安楽あんらく 一ひと 鹿之助しかのすけ
 成人おとな 一ひと 外ほか の小児せうじ 一ひと 一ひと 披群ひぐん 大おほ 一ひと 五ご 六ろく 才さい
 のおぼへト才余さいよ の小児せうじ のどく力飽ちから まいま 一ひと つくまつくま 一ひと の
 夫婦ふうふ の豪傑ごうけつ が中ちゆう 一ひと 産う 一ひと 幼子せうし 一ひと 一ひと 高たか 山さん 一ひと 山さん 上かみ に
 此諏訪このすゐ が原はら 一ひと 西北しつぱく 一ひと 阿波あわ 一ひと 嶽たけ 一ひと 高たか 山さん 一ひと 山さん 上かみ に
 觀世くわんせい 音ね 一ひと 一ひと 験げん 一ひと 一ひと 阿波あわ 一ひと 嶽たけ 一ひと 一ひと
 と信仰しやうぎやう 一ひと 月つき の十八じゅうはち 一ひと 阿波あわ 一ひと 嶽たけ 一ひと 一ひと
 一ひと 或ある 一ひと 日ひ 夫おとこ 婦めづ 觀音くわんおん 一ひと 一ひと 一ひと 山さん 中ちゆう 一ひと 村むら 一ひと 一ひと
 と通とほ 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 吹物ふきもの 一ひと 一ひと
 立た 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 吹物ふきもの 一ひと 一ひと
 人ひと と一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 一ひと 更科さらしな 一ひと 一ひと 一ひと



森之助夫婦阿波嶽へ
 のびりて井上九郎が
 間居の巻よ至る



小中がらき 是まきこゝに 天下第一の英雄 後未未も
 一に児あり 中く 某の如く 此兒と 教ふるべき人の
 に 乃に 乃に 十五才まき 預り 我力の せよふやと
 教ふる 志し たりき 夫より 此菴 ありき 薪水の
 行と 軍法 剣術と 学ぶ 一日 月久二兩
 年の うち 此兒 師も せよば ばりき 成る 此兒
 此山中 村小 育し 甲相木の 苗字と ともうり 山中 鹿之助
 天下 第一の 英雄 となり 森之助 師の 老
 り 歎き 菊川の 辺へ 菴と して 且無 洞山の 觀
 音の 像と あり 刻せ 翁の 菴と 移し 夫婦 變し
 小来 介抱 安永 此所 後未 鹿

之助と 成長 所なりと 大鹿村と 号今も あり 扱
 森之助が 紋所ハ 十六ヤりの 裏菊 是馬場 美濃
 守が 紋用 今も 猶大鹿村 法成寺の 庭前
 森之助が 紋の 形なり 今も 猶大鹿村 法成寺の 庭前
 小相木 菊石 好事の 人ハ 小夜中山 乃
 東ら 阪より 老く 入る 見あり 乃
 此 森之助 十年 諷訪 原より 馬
 場 美濃 守 密小 勝頼の 幼兒と 抱き 来り 炎之
 助 小言 近頃 主人 勝頼 倭臣と 愛し 武田
 武田の 滅亡 遠く 去ふ 其も 討
 死と 覚悟 ときめ 何卒 此若 君と 足下

長門文全集卷之五

に記のこころなり 末のふりごとかりたりまこと詫
て歸りたれ是より 森之助夫婦 恩人の一言に
此幼君と守りて立西国へ丹のむねさぬくの危難
且山中鹿之助 強勇ふし記の事ども 後編五冊
小少のふりとの事

繪本更科草帑卷之五大尾

和漢
西洋
書籍
賣捌
處

大坂心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

